第 34 回年会・男女共同参画企画ランチョンワークショップ開催報告

ワークショップタイトル：「全員参加の生命科学研究を目指して」
日時：2011年12月13日（火）12:15～13:45
会場：パシフィコ横浜 第4会場（会議センター3階・303）
企画：日本分子生物学会 男女共同参画委員会
委 員 長：後藤 由季子（東京大学）
副委員長：塩見 春彦（慶應大学）
委　員 ：井関 祥子（東京医科歯科大学）、大杉 美穂（東京大学）、佐藤 健（群馬大学）、篠原 美紀（大阪大学）、竹内 純（東京大学）、原 英二（がん研究所）、本間 美和子（福島県立医科大学）
協力：チエル（株）

第 34 回年会の初日にランチョンワークショップ「全員参加の生命科学研究を目指して」を開催した。この企画は分子生物学会の男女共同参画企画として、第 10 回目となるもので、当日は約 120 名の参加者があった。以下にワークショップの講演要旨、および第 3 部のクリッカーの集計結果、会場アンケートの結果について以下に報告する。

I. ワークショップ概要

【第 1 部】講演「これまでの男女共同参画の取組みと成果」

本間 美和子（福島県立医科大学）

今回のテーマである「全員参加の生命科学研究を目指して」、委員会が活動を行うにあたり、過去の委員会活動とその成果を確認し、今後につなげていくことを目的に、講演が行われた。（講演記録、および第 1 部スライド資料）

【第 2 部】講演「意識改革の必要性について」

塩見 春彦（慶應大学）

2部では、その前の第1部の本間委員の講演でも触れられた「無意識のバイアス」とはどのようなものか、またその解消のためにはどのように取り組み、考えていくとよいかについて、講演が行われた。（講演記録、および第2部スライド資料）

【第 3 部】聴衆参加型ワークショップ

第 1 部、2 部の講演を聞いた後、委員全員が登壇し、会場の参加者とレスポンスシステムを使ってワークショップを開催した。
今回初めて導入した「レスポンスシステム」（協力:チエル（株））は、参加者に配布した発信機（クリッカー）で、設問への回答結果をすぐに集計し、プロジェクタに結果を表示させるシステムである。本企画の参加者は約 120 名、クリッカーによるアンケートへの協力者は、98 名であった。
会場で行ったクリッカーのアンケート結果は、下記の通りである。
問１．あなたの年齢は？

1. 20 代　24%
2. 30 代　20%
3. 40 代　24%
4. 50 代以上　20%
5. わからない　3%
無回答　7%

問２．あなたの性別は？
1. 女性　51%
2. 男性　37%
3. わからない　5%
無回答　7%

問３．あなたの立場は？
1. PI（ラボの主宰者）　29%
2. PI 以外　59%
3. わからない　2%
無回答　10%

問４.「日本には男女別の役割分担という美しい文化がある」という発言について、どう思いますか？
1.（女性回答者）同感である　5%
2.（女性回答者）抵抗がある　44%
3.（男性回答者）同感である　12%
4.（男性回答者）抵抗がある　26%
無回答　13%

問５．６ヶ月前に子供が産まれた同じ研究室の女性ポスドク M さんが、夕方５時３０分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？
1. いいママなんだね　15%
2. 旦那さんか子供の調子が悪いの？　4%
3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと　3%
4. 何とも思わない　65%
無回答　12%

問６．６ヶ月前に子供が産まれた同じ研究室の男性ポスドク K さんが、夕方５時３０分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？
1. いいパパなんだね　23%
2. 奥さんか子供の調子が悪いの？　14%
3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと　7%

4. 何とも思わない　41%
無回答　14%

問７．進路選択の際に、性別を理由にアドバイスを受けた事がありますか？
1. ある　38%
2. ない　47%
3. わからない　7%
無回答　8%

問８．女性の理系進路選択を促すために有効と考えられる方法は？
1. 研究者が理科の楽しさを伝える　10%
2. 小中高でもっと自然科学を学ばせる　12%
3. 研究者の社会的地位向上（安定した生活）　32%
4. 高校で文系と理系を分けない　8%
5. 女性のPI（活躍している女性研究者/Role Model)の数を増やす　18%
無回答　19%

問９．夫婦研究者が同じ研究室に属する場合にどう思いますか？
1. 気にならない　43%
2. 絶対に嫌だ（PI でなくても）　14%
3. どちらかがPI ならば嫌だ　17%
4. 良い事だと思う　9%
無回答　16%

問１０．夫婦研究者が同じ研究室に属すると嫌だと思う理由は？
1. 監視の目が厳しくなる（ボスの愚痴が言えない等）　6%
2. フェアでなくなる可能性がある　36%
3. 夫婦だと互いに依存し合って（いると思われて）独立の研究者と見なされない　16%
4. 何となく　9%
無回答　33%

問１１．夫婦研究者が同じ研究室に属しても良い・気にならないと思う理由は？
1. 二人の方が生産性が上がる　7%
2. 家庭生活を維持し易い　12%
3. 性別でラボメンバーを 差別しないことが期待できる　6%
4. （たまたま夫婦なだけで）一緒に研究して悪い理由がない　48%
無回答　27%

問１２．最近女性に有利な研究費や、女性のみ申請出来るポジションが増えてきています。これについてどう思われますか？

1. 別にいいやん　9%
2. 不公平である　良くない　13%
3. 不公平であるが、今は必要　46%
4. まだまだ少ない　もっと推進を　17%
無回答　14%

問１３．将来はPIになりたいと思いますか／思っていましたか？
1. PIになりたいと思っている（PIになった）　36%
2. PIに必ずしもなりたくないが、研究を続ける為になる必要があると思う　27%
3. PIになりたいと思わない　10%
4. PIになりたかったが、諦めた　4%
無回答　23%

問１４．PIになりたいと思わない（あるいはなりたいが諦めた）方に伺います。その一番の理由は何でしょう？
1. 研究費獲得やメンバー指導に自信がない　6%
2. 出産などのライフイベントは不利なので、競争できる自信がない　5%
3. 自分でテーマを生み出し続ける自信がない　5%
4. 実験が好きなのでずっと実験をしたい　9%
5. ボスを見て魅力的な立場と思えない　6%
無回答　68%

問１５．今後も男女共同参画の活動は必要だと思いますか？
1. 必要　61%
2. どちらでもよい　15%
3. 不必要　3%
無回答　20%

問１６．男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか？
1. 女性研究者の研究費・ポジションの優遇、表彰などによるエンカレッジ　14%
2. 女子学生に対する科学教育の充実　7%
3. 学会における女性発表者の増加　6%
4. 研究と家庭生活の両立　38%
5. その他　12%
無回答　22%

II. ワークショップ後のアンケート集計結果

会場参加者には、用紙でのアンケートの協力も依頼した。集計結果、および記入いただいた自由記述欄の概要を下記に掲載する。
（アンケート回収枚数　80枚）

＜1＞回答者の属性

・性別

1. 男性　44%
2. 女性　53%

無記入　4%

・年齢

1. 19 歳以下　4%
2. 20-24 歳　18%
3. 25-29 歳　14%
4. 30-34 歳　13%
5. 35-39 歳　9%
6. 40-44 歳　14%
7. 45-49 歳　16%
8. 50-54 歳　6%
9. 55-59 歳　3%
10. 60-64 歳　4%

無記入　1%

・所属

1. 大学　65%
2. 研究機関　20%
3. 企業　10%
4. その他　3%

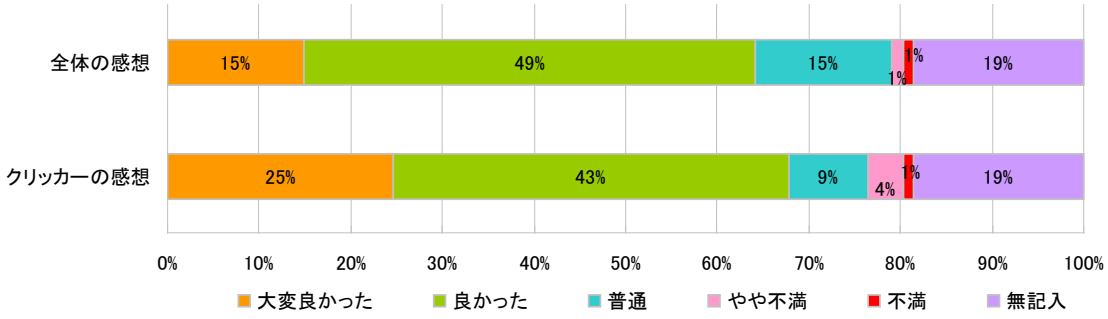
無記入　3%

・身分

1. 学部生　11%
2. 修士　9%
3. 博士　6%
4. 研究生　1%
5. ポスドク/研究員　15%
6. 技術員　6%
7. 助教　13%
8. 講師　1%
9. 准教授　6%
10. 教授　15%
11. 主任研究員／グループリーダー　1%
12. 役員クラス　1%
13. 部長クラス　1%
14. 主任クラス　3%
15. 一般社員　6%
16. その他　1%

無記入　3%

＜2＞今回のワークショップの感想をお教えください。



【第 1 部、2 部の講演について】

・塩見先生のお話は、全学会に属している PI クラスの会員で話し合っていただけるといいかと思います。

・無意識のバイアスは誰しも持っていると漠然とは思っていましたが、今日のワークショップで改めて認識しました。自覚もしました。そうだと分かっていても、日々の仕事と生

活の中で、無意識のバイアスが氾濫している世の中で、バイアスをかけない、かからないようにすることは難しいのもまた現実かと思う。
・無意識のバイアス　当たり前と思っていたことが差別意識であることを認識した。男女差はあって当然だが、男女互いの思い込みを排除すれば、差は縮むのではないか。斬新な意見が無かった。
・潜在的バイアスという keyword は、覚えて帰ることにする。自分にもあった。残念。
・本間先生、塩見先生のお話はとても共感できました。本間先生のご講演について：選ぶ側に女性が“ゼロ”の場合、なかなか状況が改善しないのではないかと不安になります。
・無意識のバイアスのお話が興味深かったです。(同様意見２名)

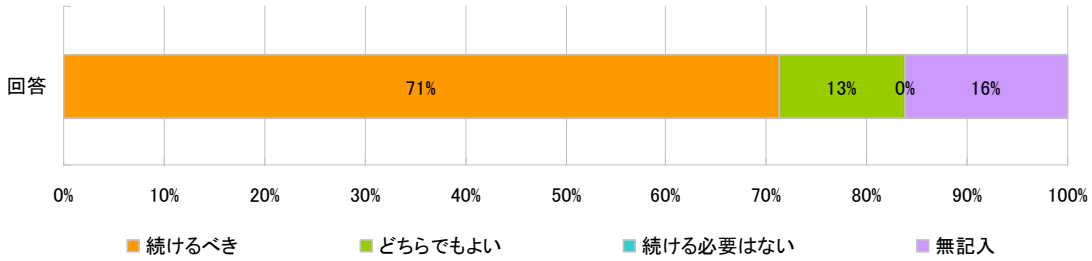
【第３部　聴衆参加型ワークショップについて】
・Cricket を使用した参加型のワークショップというこころみがとても興味深かったです。会場に来ている女性率の高さを今後、男女同じ程度まで持っていける業界になる事を願います。
・他の人がどのように考えているのかが分かって良かったが、わざわざここに足を運んでいるひとだから、「性別は気にしない」が過半数になるのであって、別の層で同じアンケートをとってみて見せて欲しかった。
・対話形式でよかった。男性パネリストが多いのはよい。
・アンケートをとっていたが、このセッション男女共同参画に興味がある人たちに片寄ったアンケートだということになる。
・会場の人たちの考えが、見られて良かった。
・聴衆のレスポンスを見ながらの Workshop は大変興味深いものでした。クリケットが途中で押せなくなったのでがっかり。
・今まで拝聴した中で最も素晴らしいワークショップでした。よく準備されていたし、問題の核心をついていたと思います。レスポンスシステムを用いたのも、効果的でした。
・良くオーガナイズされていたと思いますが、何となく台本があったような印象があります。
・クリッカーを用いた進行は、参加者全員が自分事として考えるためによかったと思います。
・今回の参加型のワークショップは非常に興味深かったです。特に問 5,6 のセットでの結果の差
・クリッカーを使ったパネルディスカッション、とても良かったです。あっという間に過ぎた。
・クリッカーが良かった。すぐに会場の意見が分かったので、もっと「退化」するような質問もあってよいのではないかと思った。その方が、男女の考え方の違いの核心に迫れると思うので。
・パネリストの方の立場をもう少し明確にした上で、コメントしていただけるとコメントに重みがあったのでは。
・アンケート結果を男女別でみれるようにしてもらいたい。(同様意見２名)
・アンケートの選択肢や解釈など、聴講者の考えが本当には伝わりにくく、レスポンスシ

ステムが逆に不満をつのらせる。パネリストのディスカッションももりあがりがいまいち。“感想”的で響かないものが多いし、何について話したいのかが見えない。レスポンス待ちが長い。
・もう少し（オーディエンスを含めた）ディスカッションの時間が欲しい。
・参加人数が少ない気がしたので、分母を増やした方が、クリッカーの結果に精密性が上るのではないでしょうか。
・質問がナンセンス。何故、何を問題にしているのか理解できない。
・設問、選択肢が十分ねられておらず、ステレオタイプ。誘導質問的なものが前半は多かった。レスポンスシステムの感想を“やや不満”としたのは、テンポが悪い。ボタンが固い。
・テンポが悪いのをどう改善するか？会場からの反応を聞くべき。一般論に討論がなりがち。クリッカーは、男女で分けられる方がよい。
・パネリストの先生方に“今”の者の危機感が全く分かっていない。同ラボ出身の成功女性がパネリストに多すぎる。アンケートの意図が全く見えない。

【その他】
・いつも研究者としての生き方を教えていただいている。複数のパネリストがいたのが良かった。
・男女の問題を学会で発表することは、大切なことだと思います。考えさせられます。
・男女共同参画というとどれも内容が似ているなと思った。
・非常に勉強になった。レスポンスシステムも面白かった。
・トップを走る女性研究者の先生もおり、非常に興味深かった。
・お昼目当てでお邪魔しましたが、非常に面白くすごせました。
・「役割の違い」に対する考え方は、人それぞれで多少かたよっていてもよいと思う。自分の考えには従いつつ、より差別のないふるまいを身につければよいのでは。ただ積極的に働きかけないと女性の活躍の場が少ないというのはショック。
・とても良かった。
・今年は参加者が少なかったように思います。（同意見４名）
・パネリストの数が多すぎる。現場の理科教師の発言がほしかった。
・多少方向性が規定された（つまり「こうあるべきだ」）という議論が多かった。企画者側に先入観がありすぎるのでは。参加者はかなりリベラルな意識をもはや持っているのではないでしょうか。
・性差研究をする立場からは、“生物学的性差”と“社会的性差”とを明確に区別して論議すべきと思った。
・保育士等が充実した託児所が効果的　昼食等もまかせられることが望ましい　予約、煩雑な申込み不要が望ましい。無料が望ましい。まずは参加の妨げになり、かつとり除くことの出来る要因を可能な限り除去することが必要です。
・今後は、男女両方にとって良くなるためのワークショップにしていってください。女性のために必要だと思う。
・子供の保育施設の充実は必要だと思う。

・男性への支援も重要だと思いました。
・女性研究者は、二つの問題がのしかかっている。（女性であること、研究者であるということ）私は３０代半ばで未婚だが、非常に社会的に肩身がせまい。また、研究も続けていくことは、金銭的にも大変であり、一般企業に就職した。もっと女性が社会で活躍できる意識改革も必要だと痛感している。頑張っている女性の意見を聞くことが出来て、非常に元気が出た。
・自分も夫に同じくらい家庭のことをやってもらえるか、というとかなり難しいです。偏見を無くすのは、すべきですが、なかなか難しいとヒビ感じています。
・これまで１０年の成果を実現するために何をするかを提案することが重要、例えば年齢により必要な事をあきらかにしつ、何をどうしたら解決できるかを具体化することが大事。以下省略。
・現状や今考えなければならない問題を聞くことが出来てよかったと思います。
・男女共同参画はいいと思いますが、何となく無理やり女性を表に出す割合を増やすという感が否めません。本間先生も言っていましたが、現在一線で活躍している女性がリーダー・オーガナイザーとなって、女性のスペースを広げていくことが大事だと思います。私は、「女性を積極的に採用する」という文言が嫌でたまりません。男女平等というのが、大前提だと思います。男女共同でかつ平等であるべきでそれ模索する方が大事ではないでしょうか。
・啓蒙としては、とても良かったと思います。もう少し、「ではどうするのか」という議論が出来るとよかったです。

＜3＞今後も年会において男女共同参画ワークショップを行うべきだと思いますか。今後取り上げて欲しいテーマをお教えください。



【育児について】
・子育て世代への支援は男女共に応募できるようなシステム。
・育児支援
・年会における託児室の様子、利用状況。
・産休、育休からの研究復帰について

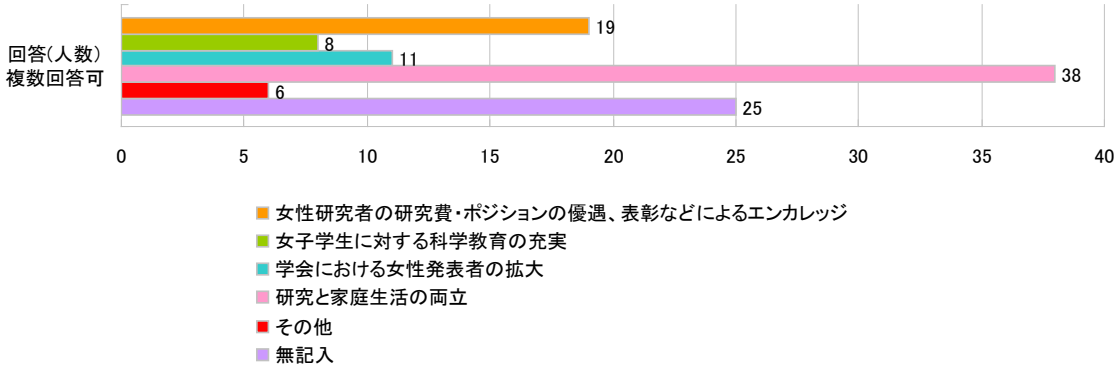
【男性の意識改革、男性への意識改革】
・女性に対することも大事ですが、男性に対する意識改革
・いかに男性の意識を変えるか？男性会員に参加してもらうか？
・全体で行ってほしい。男性にとっても、研究しやすい環境作りに取り組んでほしい。

【ライフプランについて】
・定年前の過ごし方
・女性研究者のPIを増やさないと現状が改善されないと思うが、PIになりたい女性が少ないのであれば、それは自分で自分の首をしめていることになるのでは？この点について、話し合ってほしい。
・女性研究者のライフプラン（ロールモデル）。キャリアの歩み方
・女性のロールモデルの方の経歴紹介

【日本と海外の比較】
・研究者同士の結婚後、同居することがむずかしいのが現状です。アメリカ等では、パートナーも同じラボで働けるように配慮する制度があると聞いています。「日本にもそういう制度を導入してもらえたら良いのにと思います。」
・日本以外の取組み
・先進国で女性研究者の割合が一番低いとあったのに興味をもちました。私は日本人で「日本らしさ」が好きですが、この考え方と女性研究者が少ないことと関連ってあるのでしょうか？

【その他】
・フロアからの意見もありましたが、子供の教育現場で男性＝女性ということをどう教えるか、認識させるかが重要だと思います。
・ワークショップを行っても、関心の高い人しか集まらないので、どうしたらよいか、難しいと思います。
・「無意識」の事例をもっと集めて明示していくとよいかも。例えば、女性の持つ女性への「無意識」
・グループディスカッションなど、参加者がパネラーと話せるような機会があったらいいと思います。
・過剰な女性の進出をあおるWSなら不安。ステレオタイプ意見が出来ない様なWSはある意味恐ろしい（言論統制の様で）あくまで男女平等に共同参画を進める方法を探すということに視点を移したほうがよいと思います。
・お昼めあてでお邪魔しましたが、非常に面白くすごせました。
・学会の役目はもう終わりつつある。

＜4＞男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか？（複数回答可）具体的なご意見をどうぞお書きください。



【選択肢 1：女性研究者の研究費・ポジションの優遇、表彰などによるエンカレッジ　について】

・女性 PI を増やす。人数を増やす目的で、低いポジションをいくつも増やすのではなく、意見の通る職、PI を増やすべきである。

・女性が研究に参加したくても参加できないというのなら、それは改善されるべきだと思う。しかし、女性研究者だからといって、研究費やポジションが優遇されるというのは、逆に差別的であると感じる。

・ジャーナルの発表実績を元に、産休、育休でブランクが生じた女性研究者がスムーズに復帰できるような研究費を、より充実してほしい。

・不公平をいう考え方は、非常によくわかることだと思いますが、実際には不公平だと思えない優秀な女性が表に出てくることが意識改革につながると思います。

・無理に進めるのは、間違っていると思う。正当に評価される“場”を作るにはどうしたらいいのか？これが最終的に女性研究者に一番のエンカレッジになると思います。海外で成功している国を、平等である国が多いです。ポジション優遇は、ある意味、女性蔑視ではないでしょうか？

【選択肢 2：女子学生に対する科学教育の充実　について】

・女子生徒（学生）に、女性研究者の方と交流できるイベントをより多く設けるべきと思う。

・小中学生（女子）に対する理科の面白さを教えることが重要と思います。また、親（母親）にも、理科の面白さを分かってもらう必要があります。

【選択肢 3：学会における女性発表者の拡大　について】

・露出が増えれば、それだけ女性の活躍の場が増すというデータだったので、すぐにでも出来て、結果に表れる方法をすすめるべき。

【選択肢 4：研究と家庭生活の両立　について】

・男女ともに

・研究職に就いてもしっかり家庭のことが出来るような環境にしていきたいです。

・研究と家庭生活の両立には、個人の偏見との戦いになるので、コストはかからないようで大変である。（選択肢）１（女性研究者の研究費・ポジションの優遇、表彰などによるエ

ンカレッジ）の方がコストはかかるが、容易。
・男性が育児・家事できる環境

【選択肢５：その他】
＜研究者の生活の安定＞
・大学、研究機関レベルで教員、研究者の休暇等の強制力をもたせる。（裁量労働制で返ってラボにしばられる時間が長くなりがち）
・“女性”に限定せず、いまの研究生活の改善を進めていってほしい
・安定したポジション、給与を得ることが非常に難しい。この問題を解決すべき。
・“研究者の社会的地位向上”というのは、男女どちらにも言えることだと思います。
・生活の安定感（安心感）があることを示した方が進みやすい。

＜意識改革＞
・男性も含めた意識改革　他の方の意見にもありましたが、子供の世代からの gender 教育の見直し、学校教育（小中高）での親の意識改革が必要なのかと思います。また、参加を希望する方の中だけで話し合いをしても、そこへ来ない方々の意識は変わらない、ということはどうしたらよいのかと思います。
・まだまだ男性の意識改革が必要
・年配の教授、PI の意識改革（女性に対する根強い差別意識があり、職場にそれが現れている）
・社会の中では、男女の性別による差別がまだ完全には払しょくされていないので、意識的な改革が必要
・でもやっぱりえらい「オジサマの意識」（女性であることを理由に、男女共同参画の委員に任命するような考えしか持っていない。自分がなれっつーの）は、今そこにある問題。でもあきらめるしかないのか
・男女に能力差などないということをひたすら言い続けることを分生会員皆に徹底する必要がある。
・塩見先生の議題にありましたように、男性の無意識（女性も）に焦点をあてて、まずは気付いてもらうことから、広めていくのがよいのではないかと思いました。
・男性が従来の固定観念（外で仕事をするのは、男性）があるというのは、差別というより、女性に外で働いてもらうことを推進するようなことをいうと、自分側（男性）が怠け者になってはならないという意味を含んでいるのではないか。（タイ・フィリピンで女性研究者が多いのはそのようだ。）
・男女比が男性側に偏っていて、なおかつ男優位な考え方が多くを占めている以上、男優位な考え方を「かっこ悪い」という男性が増えない限り、焼け石に水な気もします。ただ取組みは不可欠なので、活動の大変さも想像できますが続けていくべきと思います。
・親の教育
・小学生などのうちからの教育が大きく関わってくると思うので、そういった視点も加えていただきたいです。
・民間企業では、男女共同参画など、当たり前のことなのに、何故アカデミアでは、こん

な前近代的なことを問題にしているのだろうか？民間企業の仕事と研究職との違いはあるのだろうか？私は否と思う。PI の意識、組織の問題点を徹底的に議論すべきと思う。また、女性自身の意識の改革。

＜その他＞
・「男女共同参画における問題点」みたいに大上段にふりかぶらず、「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」みたいなテーマの方が楽しい。
・多様な人（立場、考え方）が存在する社会の形成
・（選択肢）1～3 は女性（研究者）を encourage する方策だが、“3”についてはコントロールすることに抵抗がある。また“2”は女子学生のみというのは、多少違和感がある。幼少期から、小学校までの子供たちへのアンケートでは、男子は「博士」などが必ずランキングの上位にあるが、女子にはほとんど見られない。つまり、男の子らしさ、女の子らしさが非常に小さい時から親によってもたらされている。従って、初中等教育で科学を伝えるというのは、現状とは異なる方策だろう。日本で最も深刻な問題なのは、おそらく“4”だろう。これはサポートしなくてはならない。
・研究における女性の関わりは研究者だけでなく、技術支援というポジションがある。このポジションの扱われ方がひどく、差別も大きい。何とかしてほしい。議論をする場を持っていただきたい。
・お昼めあてでお邪魔しましたが、非常に面白くすごせました。
・ロールモデルとなる女性研究者にもっと出会いたいです。
・家庭の問題は、子育てだけなのか

＜5＞ 今後、男女共同参画委員会で行って欲しい事業やイベント等があればお教え下さい。

【行ってほしいこと】
＜イベント＞
・もっと大多数の方を対象にしたワークショップ　今回のようなアンケート
・塩見先生から男性 PI（女性 PI）を教育するイベントがあるとよいです。
・大学などでも企画を行ってほしいです。
・女性研究者同士の交流（ロールモデルと接する機会を持ちたい）
・そろそろ子育てだけでなく、介護に関してもとりあげてほしいです。介護サービスは利用可能な時間帯も「専業主婦」が在宅している時間に設定されています。会社員よりは融通が利くとはいえ、勤務時間がはるかに超過している業務形態なので、なかなか介護をポスドクが一人でっていうのは、難しいです。

＜その他＞
・男性の育児支援。
・男女共同参画に賛成の PI と不理解の PI がいる。実際に入ってからでないと気づけないことがある。難しいが、情報が得られるようにしてほしい。
・PI になる一歩を踏み出すのに大きな壁があるので、それらのハードルを低くする（意識

によびかける）ような結果を示してもらえる場があると納得する。

【その他】
・若い人（ポスドク）をパネリストに加えるべき。
・成功しているPIの方たちだけパネリストなのは、疑問。今ポスドクで苦しんでいる人たちも含めて本当の声を聞いたほうがいい。
・今回のシステムはとても楽しかったし、on timeのdataが取れてよかったと思います。
・ファミリー向けの提案　学会の企業ブースなどで子供が遊び、両親が発表などしていたら、とても良い！と思いました。
・自由討論

＜6＞その他、ご意見がありましたらご自由にお書きください。

【今回のWSについての感想】
＜第1部、2部の講演について＞
・男女の意識差について、「日本は特殊」との講演があったが、日本という大きな文化的枠組が個々の意識に反映されているので、科学というグローバルな場で活躍しなければならない学会の視点だけが突出している印象を持った。分子生物学会の男女共同参画は多少教条的？「無意識」ではなく、文化的部分の支配が大きく、それそのものは、変えるべきというのは、少し短絡的ではないか？私は、ケーススタディーを提示し、個々の研究者に地道に意識改革を進めていく方が好みですね。

＜第3部　聴衆参加型ワークショップについて＞
・質問が意図不明。何のためにきいているのか分からない。
・パネリストの紹介が軽くほしい
・最後にfloorから出たご意見に強く賛同する
・私自身は女子校出身で、“Super Science High school (SSH)”の指定を受けていました。そのおかげで高校時代に研究者の講演を聞いたり、実験に参加することができ、理系志望が強くなったと思っています。
・夫婦で同じラボを share するのは良いことかもしれないが、研究テーマ（研究分野）は別にしないと男女共同参画の理念に反するように感じる。やはり海外では、夫婦で同じフィールドをやっている人は非常に少ないというか、きちんと仕事を分けている。

【今回の男女共同参画企画全体について】
・今回学会に参加させてもらえて、初めてこのワークショップに参加しました。いつも夫から話をきいていました。まだまだ課題は沢山あると思います。何か自分にもできることがないか考えます。
・研究者は、“男性”“女性”にかかわらず、能力でのみ評価されるべきだと思う。もし、現状でそうなっていないのであれば、このような活動は必要だと思った。
・是非今後とも続けてください。
・竹内純先生がおっしゃっていたように、回りの環境、特にPIの理解は大切だと思います。

夫婦で同じラボ、ある程度は夫婦であるがゆえというのはよいのではと思います。夫婦であることが自分達にとっても周囲にとってもポジティブな効果が出ればよいと思います。後藤先生の「PI になってみたらできると思った」というコメントに感動しました。

【現状を改善するために】
・PI は研究者としての優秀さも大事だが、人間としてのバランス（人間性）がかなり大事だと思う。この面を重視して PI はえらばれるべきである。→でないと下につく（PI でない）女性研究者は苦労する。
・欧米（アメリカ、イタリア）のように、不安定かも知れないが、PI ポストを今の 100 倍増やす対策を考える。この場合、PI の条件は、給料は少なく、研究費はある程度あって、女性もアプライしやすい（すごすぎると男性にとられると思ってトライできない。）
・結婚しても姓が変わらなければ、少し日本人の意識も変わるのかも。女性科学者が活躍するアニメ、マンガをつくるとか？PI への一本道しか、道はないのでしょうかね。PI の数は多分そう多くないだろうと思われ、そこへの一本道しかないなら、必然的に身分や立場が不安定になりますよね。
・アカデミアは無法地帯なのか？最低限の法的保護もないがしろにされているように見える。法律家の意見を入れたほうが良いと思う。そして女性自身の実践が全てを解決する。
・意識改革を“どのように”すれば実現するのか、もっと具体的に考えていくべきだと思います。各アンケートについてもっと議論があると良かったと思います。「安定を求める」というお話がありましたが、本質的には「選択肢をもっているか」どうかだと思います。ポスドクになったら、就職できないなどというせばまりがハードルになっている気がします。

【その他】
・これまでの取り組みにより、確実に男女参画が進んでいると思います。長期取組みが必要。
・学部生なので、将来・進路についてはよく考えます。理系・女性というのはマイノリティであると思っていて、自分の武器になると考えています。そういった視点はあまりないのでしょうか。
・委員会の委員はどのように選ばれているのかを知りたいです。（公募にしてはどうでしょう。）委員は男女均等にいろいろな分野にまたがった方が良く、もっと医学の分野の女性も入るといいと思います。オーガナイザーの女性を意識的に増やす必要があります。
・現在は性別に関しても多様なあり方があるので、メインの議題ではないにせよ、考慮した発言も欲しかったです。（たとえ 1%もいないにせよ）
・大学教員などの公募で、女性限定のもの、女性を優先的に採用するというものがあるが（問 12）、男女雇用機会均等法にひっかからないのでしょうか？男女差別を感じます。
・取り組んでいる事は分かるが、具体的に女性は（もしくは男性も）どうずればよいかわからない。ロールモデルを示してほしい。